



National Institute of Technology, Hiroshima College Library

図書館だより 第52号

2019年（令和元年）10月1日
独立行政法人国立高等専門学校機構
広島商船高等専門学校



廃線となった三江線宇都井駅のイルミネーション（2018年11月撮影）

— 目次 —

< 巻頭言 >

長い文章を読む習慣…………… 図書館長 風呂本正典 (2)

< 寄稿 >

読み書き算盤(よみかきそろばん)…… 流通情報工学科長 田上 敦士 (3)

方法なんて何でもい…………… 電子制御工学科 峠 正範 (4)

これからの働き方について…………… 一般教科 下田 旭美 (5)

島から見る夕日は本当に綺麗と思う…………… 商船学科 大野遼太郎 (6)

職員のおススメ本…………… (7)

トピックス…………… (8)

編集後記…………… (8)



長い文章を読む習慣

図書館長 風呂本 武 典

本を読む習慣がない、新聞も読まない、ネットニュースにも目を通さない、メールも長いのは嫌、ショートメールかLINEの数行しか読む気がしない、という学生は多い。(いや世間の大人たちの多くもこういう状況と聞く)、また書く方も、作文、小論文は大の苦手、エントリーシート書くのも面倒、普段はショートメールかLINEくらいしか打たないという生活を送っているようだ。好きな人ができて今や、ラブレター？何それ？であろうか。

学生諸君の読解力の低下、作文能力の低下が問題になって久しく、近頃は国語が苦手だけでなく、科目問わずに文章題が苦手、問題の意味を読み取るのが苦手、という傾向が顕著である。そして問題文の前後から意味を類推すれば解き方のヒントが書いてあるにも関わらず、はっきりと短文で指示が書いていないと、「さっぱりわからん」のである。確かにこれでは普段のテストで成績が上がらず、やがて就職活動で小論文問題が出たときや卒業論文の作成にも困るだろうと心配になる。さらにレポートや卒業論文などは参考文献を読み込み自ら必要な情報を抽出して文章に再構成する能力も必要になる。高学年になれば学生さんもそこは気になるとみえ、卒研や演習ではいくぶん苦悩している様子もうかがえる。

ところが、この国語力—文章力というものは日々国語を使用することで鍛えられるもので、習慣によって身に付くものであるから、高学年になって慌ててエントリーシートや卒業論文作成の手引書を読んだり、ネット

上のサンプルやフォーマットを利用したりしても簡単には習得できないのである。その結果、国語力の応用が利かずに、サンプルそのままの文章やフォーマットを自分用にアレンジすることさえままならない事態を招いてしまうのである。

何を書いてよいか判らない、自分の考えが文章にならない、酷い場合には手引書の内容さえ理解できない。そうなってから付け焼刃に勉強してもうこれはしんどいばかりである。ほかにも勉強しなければならない科目はたくさんある、本来の目的は例えば卒論作成であり、今さら国語力の向上を図ろうにもそんな時間はない。もっと本を読んで文章慣れしておけば良かった…

さんざん言われてきたことであろうが日本語を使って生活する以上、国語能力というものは一生ついて回る必要不可欠なものである。いずれ高学年で必要になってから勉強しようでは忙しい時期に苦痛を伴う学習をすることになる。そんなシンドイ思いをするくらいなら習慣づけで自然に身に付くようになった方が良いでしょう。そのためにも低学年のうちから長い文章を読む習慣をつけよう。読書は読書感想文の宿題をするために仕方なくするのはこれまたシンドイ。最初は自分の読めそうな軽いものでも構わない。本校図書館には幸いライトノベルも沢山置いてある。そして次に自分の興味ある分野の易しい本を読み通してみよう。長い文章に慣れてくれば、読書が苦痛でなくなる。習慣になればあとは自然に読書を通じて一定程度の国語力は養われるものである。



三江線廃線跡トロッコ実験実験でトンネルから見る江の川鉄橋

読み書き算盤（よみかきそろばん）

流通情報工学科長 田上 敦 士

読み書き算盤とは「文字・文章を読むこと、内容を理解して文章を書くこと、および計算すること、ならびにそれらができる能力をもっていること。」（世界大百科事典第2版）と定義される。

当たり前といえば当たりの前のスキルなのだが、しかしこれが当たり前ではない、という危機感を多くの社会人（とくに指導的立場にある人たちが）が発信していることを皆さんはご存知だろうか。

私たちも含めて、最近の若い人たちへの教育は技術偏重にすぎて、より本質的な読む力、書く力、そして算盤（身の回りを確認しながら考える）力が不足しているのではないか、という危機感を持つ大人が増えておりその必要性が叫ばれているのだ。

ところで、私たちの知性は、単なる学力ではなく、私たちの骨身にしみついたものである。

スポーツを考えてほしい。皆さん色々な競技に励んでいるだろうが、その技術を身に着けるために必要なのは基礎体力だ。「走り込み」はどの競技においてもその重要性をうたわれているだろう。知性というのは単なる勉強ではなく、走り込みで得た筋力のように、私たちの骨身に染み付いた「基礎知力」とでも言うものだ。

高専教育は日本の一般の人達が受ける教育とは異なり、早い段階から学生それぞれが専門に特化した教育を受け、卒業までの五年間それにどっぷり浸ることが出来る。その恩恵を痛感している皆さんが多い事だろう。

ところで、SEなどの世界では純粋理系の人材もだが文系の人材も歓迎されるということをご存知だろうか。

たとえば、文学部日本文学科卒で平安文学を専攻したIT企業の社長もいれば、考古学が専門だったという方もいる。なぜそのような事が起こるのだろうか？

ある興味深い調査結果がある。とある総合大学の経営学部の研究者がその大学の各学部の卒業生の入社後の活躍の様子について、企業の人事担当者にその評価を尋ねたものだ。

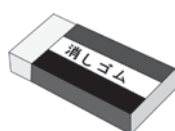
その調査で示された結果は、当初の想定を大きく覆すものであった。会計や経営理論などを学び経営系の学部を出た学生は、入社当初は文学部を出た学生よりはるかに高い評価を得るものの、数年もたつと文学部卒の学生の方がより高い能力の向上を示す、というものである。（比較対象が理工系学生でなかったのが残念だが）

この結果から考えられたその考察は、文学部出身の学生は基本テキストを読みこなす習慣が身につけており、知らない技術に直面した時には、すぐには対応できないまでも、自分で学習する時間を持てば、独力で成長出来る、ということであった。

紙幅に限られるので詳細な説明は省略するが、高専で高度な理系教育を受けている諸君たちだからこそ、自ら読書に親しみ、自ら成長する基礎的習慣を今のうちに身に着けてはどうだろうか。

ただ、好きな事を好きなだけするだけでは、その後の伸び代は必ずしも多くはないというのは先人たちが私たちに残してくれた貴重なアドバイスだ。食わず嫌いではなく、私達は様々な力を身に着けないといけない。

読み書きの力が、我々の「基礎知力」なのだ。将来あなたを助けてくれる力となるのだ。



方法なんて何でもいい

電子制御工学科 峠 正 範

技術の進歩とともに本の形態、読む方法やきっかけも多様となってきました。本の形態は、文字や絵が印刷された紙を装丁した“書籍”に加えて、それを電磁的に記録した“電子書籍”も普及してきました。さらに電子書籍は、インターネットを介してパソコン、スマートフォンやタブレットなどによりいつでもどこでも閲覧できるので読書の“方法”も様々となりました。また、書籍に興味を持つ“きっかけ”も、本屋での出会い、SNSやブログによる紹介、ウェブ広告など様々です。

私は、“文字”はよく読みますが“本”はあまり読みません。しかしながら、映画はよく観ており、観た映画のパンフレットは必ず購入して読んでいます。パンフレットには、制作の秘話、監督やキャストのインタビュー、評論家のレビューやそれではしか読めない情報がわかりやすく多数の写真を交えてまとめられており、映画への興味をそそられます。そそられた興味から原作を読むこともあり、映画とパンフレットは私にとって本を読む“きっかけ”になっています。

さて、映画をきっかけとして原作を読んだ作品のひとつに2016年に公開された「オデッセイ」(20th Century Fox, 2015, The Martian)があります。この映画は、2014年に和訳出版された小説「火星の人」

(Andy Weir, 2011, The Martian)を原作としたSF映画で、科学技術考証の正確性とNASAの全面協力による映像の現実性に興味をそそられました。あらずじは、「火星という究極の絶望的状况に独りぼっちで取り残された宇宙飛行士の想像を絶するサバイバル・ストーリー」(東宝(株)映像事業部, 2016, オデッセイ)です。

映画を鑑賞した後、パンフレットから原作を知り、すぐに“電子書籍”で原作をダウンロードして読み始めました。原作を読むと映画では描かれなかった情景「宇宙船ヘルメスをリッチ・パーネル・マヌーバによって火星に向けてコース変更した時の残酷な決断」やパンフレットに掲載されてない情報「火星の地図」がわかり、逆に映画の方がイメージしやすい情報「ヘルメスの船体の形状や内部の構造」も明らかになりました。

映画のパンフレット(紙の書籍)は文字と写真を交えた風景を触覚的に体験できる上に所有欲も満たされます。電子書籍は書店に足を運ばなくても購入でき、いつでもどこでも読めます。“読む”体験の方法や“きっかけ”は多様です。最新の技術の導入と使い分けによって体験の質を高められれば幸いです。



これからの働き方について

一般教科 下田 旭 美

「人生100年時代」という言葉を耳にしたことはないでしょうか？厚生労働省によると、日本は現在、100歳以上の高齢者が6万9,785人(2018年9月時点)おり、30年前より約50倍に増えています。そして、このまま医療が発達し、人間の平均寿命が年々延びれば、いずれ100歳まで生きることが当たり前前の時代が来ると言われています。実際に、日本政府は、この予測のもと、2017年に「人生100年時代構想会議」を立ち上げ、これまでの「人生80年時代」から「人生100年時代」へ人生設計そのものの見直しを含め議論をしています。さらに、IT化、人口知能(AI)やロボット技術の進化などが加わり、かつてないスピードで世の中が変わりはじめているとも言われています。それに伴い、これまでの価値観や多くのひとが体験した「標準的な人生モデル」が追及できなくなると考えられます。そのような時代の流れの中で、将来どのように生きていくのか、また、どのように働いていきたいのかについて興味を持ち、ここで紹介する本を手にとってみました。皆さんが就職・進学など将来について考える際にもヒントになるのではと思いましたので、ここで紹介します。興味があれば、是非読んでみてください。

1冊目は、「10年後、君に仕事はあるのか?——未来を生きるための『雇われる力』」です。この本は、元奈良市立一条高等学校の校長である藤原和博氏(教

育改革実践家・元リクルート社フェロー)が生徒や先生に向けて、10年後の近い未来の姿をイラストとともに分かりやすく説明しています。また、そのような時代を生き抜くためにはどんな力を身につけておくべきなのか?について、具体的な対処法を含めて述べられています。特に一生を90年とし、そのライフデザインをどのように考えるのかを具体的な数値などで示しながら説明してある点が印象的でした。

2冊目は、「10年後の仕事図鑑」です。著者の堀江貴文氏は、実業家であり投資家で、タレントや宇宙ロケット開発など幅広く活躍しています。もう一人の著者である落合陽一氏は、「メディアアーティスト」という肩書きを持つ、研究者です。落合氏は、28歳という若さで世界最先端の研究者を選ぶ「米ワールド・テクノロジー・アワード」を受賞しています。

本書では、今後の未来において、著者2名が考える、なくなる仕事・変わる仕事・生まれる仕事・伸びる仕事がイラストを添えながら紹介してあります。印象深いのは、一般にAI化=仕事が奪われるというネガティブなとらえ方が多いと感じる中で、ポジティブな側面についての考えが紹介されていたことです。AI化によって、なくなる仕事はあるが、一方で、新しく生まれる、創り出せる仕事も沢山あることがわかりやすく述べられていたと思います。



配置場所：図書館開架
請求記号：159.7 / F56



配置場所：図書館開架
請求記号：304 / H87

島から見る夕日は本当に綺麗と思う

商船学科 大野 遼太郎

よく本を読む家庭で育ったということもあり、小さい頃から読書が好きでした。

私の祖父は好きな小説家の名前を私に付けるほどの読書家で、幼い私に本の魅力を最初に伝えてくれた人です。よく本を買い与えてくれ、感想を伝えるととても褒めてもらえました。もはや祖父に褒めてもらうことが本を読む目的になっていた時期もあった気がします。

この図書便りのエッセイの執筆依頼を頂いたとき、やはり図書便りというくらいだから何か本について書くべきだろうと思いました。今まで読んできた本の中からどれについて書こうか、と。しかしこのようなエッセイでは通常一冊の本について、人生に与えた影響や大きく感銘を受けたこと等を書くのが相場でしょう。ですがそれではあたかも私という人間のうち、かなり多くの部分をその本に依るものが占めていると誤解されかねないと考えました。もちろんそのような本はありますが、それは一冊だけの本に依るものではないですし、複数のそれらについて書くスペースも本稿にはありません。

そんな訳で、つい先日読んだ本を紹介するのが安牌だなと判断しました。

少し前にカズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞されました。大変興味がありましたが、このタイミングで買うと受賞の話題に釣られたにわかな人みたいになってイヤだなと思い、受賞作の隣に並んで平積みしてあった「日の名残り」という本を手に取りました。にわか感懐は拭いきれない選択ではありましたが、非常に読んでよかったと思える本でしたので紹介したいと思います。

舞台は第二次世界大戦が終結して数年後のイギリスで、主人公のステーブンスは大きな屋敷の老執事です。かつてダーリントンホールは古き良き英国を体現する立派な屋敷でしたが、今や人手不足に陥ってしまっています。そんな中ステーブンスは、かつて結婚を機に屋敷を去った旧女中から手紙を受け取ります。直接書かれてはいないものの、文章から感じさせるダーリントンホールへ戻りたいという旧女中の気持ちを期待し、ステーブンスは車で旅に出ます。

信頼できない語り手である主人公によって6日間の旅と思い起こされる回想が手記のような形で語られる形式となっており、それらを通して自身の選択を思い返したり、考察したりします。

いくつかのテーマについて主人公は考察しますが、その中の一つである「品格：Dignity」についてステーブンスは葛藤します。執事としての高みを目指す。では目指すべき偉大な執事とは何なのか、何を以って偉大な執事となり得るのか。そこには品格が大きな要素として在るのではないかと考えます。では品格とは何なのか。

主人公は理想の実態を追求し、定義し、それをストイックなまでに実行します。その果てに得ることができたものと、代償として失ったものについて考えたとき、一人の老執事は何を思うのでしょうか。旧女中からの手紙を読んだステーブンスが感じたように、明確に示されていない心情が文章から伝わってくるような気がします。

様々な解釈ができる物語だと思いますが、すぐに読み直したくなるような、素晴らしい結末でした。図書館にもあるようなので、ぜひ手に取って頂きたいです。読後はいつも見ている風景、例えば、島影に沈む夕日とかがいつもと違って見えたりするかもしれません。



配置場所：図書館文庫本
請求記号：933 / Ka

職員のおススメ本

「空の黄金時代」加藤寛一郎

(配置場所：図書館開架 請求記号：538.028 / Ka)



ライト兄弟の飛行機が空を飛んでから、実験機 XS-1が初めて音速を超えるまで、わずか二世帯ほどの期間にすぎません。この本では、空を飛ぶ魅力に取りつかれた何人かの主人公にスポットをあて、年代記風にその間の出来事が描かれています。登場するのは、最初期の女性パイロットのパンチョ・バーンズ、ジャッキー・コ克蘭、太平洋戦争中の東京初空襲の指揮官として知られるジェームズ・ドゥリットル、XS-1のテストパイロット、チャールズ・イエーガーなど。イエーガーは第二次大戦中に戦闘機乗りとして活躍した後、テストパイロットとなり、事故と隣り合わせの危険な飛行を乗り越えて、ついに1947年に初めて「音の壁」を破ることに成功します。好きなことに打ち込んで、その道を極めた人たちの人生は素晴らしいと感じさせてくれる本です。

「この世界の片隅で」この史代

(配置場所：図書館開架 請求記号：726.1 / Ko)



広島から呉に嫁いだ主人公すずを中心に、太平洋戦争中の普通の人々の生活を丁寧に描いた作品です。後半では、呉空襲や広島への原爆投下といった出来事に翻弄されるすずとその一家が描かれます。映画化もされて話題になりました。私が子供だった頃（20～30年くらい前）は、戦争を経験した人がたくさん現役で活躍しておられ、戦争体験を聞く機会がよくありましたが、最近そのような機会がすっかり少なくなりました。戦争を描いた作品にありがちな暗い感じは、この作品にはありませんが、戦争の悲惨な側面を描いた作品という点は共通しています。呉や広島といった比較的近い場所で戦時中にあったことを、この本を通じて、ぜひ皆さんにも知ってほしいと思います。

「ツバキ文具店」小川糸

(配置場所：図書館開架 請求記号：913.6 / O24)



この本は「手紙」を題材にした小説です。主人公の雨宮鳩子は、鎌倉で小さな文房具店を営むかわら、依頼人に代わって手紙を書く「代書屋」をしています。鳩子のもとには様々な悩みを抱える人たちから代書の依頼が持ち込まれます。手紙の書き方から、紙、万年筆といった文房具に関する様々な蘊蓄が出てきて、手紙というのは奥深いものなんだな、と考えさせられます。そして、鳩子と同様に代書屋をしていた亡き祖母との愛憎。これについては、実は著者の小川糸さん自身の体験が元になっているようです。（詳しくは近著「針と糸」のなかに書かれています。）

このメールと SNS の時代だからこそ、手紙には何か特別な価値があるように思われます。多部未華子さん主演のテレビドラマ版をご覧になった方も、ぜひ原作のほうを読んでみてください。この本を読むと、あなたも手紙を書いてみたくなるかも？

文献検索ガイダンスを実施しました

7月9日（火）、図書館内のラーニング・コモンズにおいて文献検索ガイダンスを実施しました。このガイダンスは主に5年生、専攻科生の希望者を対象に毎年開催しています。講師は、ここ数年に引き続き本校電子制御工学科の浜崎淳先生にご担当いただきました。当日は15名の学生が参加し、浜崎先生からは論文を書く前になぜ文献検索が必要か、グーグルなどの検索結果とデータベースの検索結果の違い、本校で利用できるJDreamⅢの使い方などについて説明がありました。参加された皆さんが、学んだ事柄を今後の学習に役立てられることを期待します。



知的書評ゲーム
ビブリオバトル
in 広島商船
発表者募集!!

日時：2019年10月7日（月）16：15～
場所：図書館ラーニングコモンズ

図書館では4・5年生・専攻科生の方を対象にビブリオバトルで発表いただける方（パトラー）を募集します！関心のある方、ぜひお気軽にご参加ください！！

参加いただける方は図書館事務室（メール：toshok@hiroshima-cmt.ac.jp）までお名前・学年・専攻科・紹介する本のタイトルをお知らせ下さい。
当日発表を願っていたらだけでも募集します。予約不要ですので、直接会場にお越しください。

ビブリオバトルの手順

1. 発表者（パトラー）が面白いと思った本を持って来る
2. 順番に一人5分で本を紹介（スライドやレジュメはなしで）
3. 2～3分間会場の参加者からの質問を受け付け
4. 全員の発表の後「どの本を読みたくなったか」を基準に参加者全員が投票し、「チャンプ本」を決める

*このビブリオバトルは全国大学ビブリオバトルの手順として実施します。チャンプ本に選ばれた方は、地区決勝（11月）広島県立図書館にて参加できます。（交通費支給あり）

「ビブリオバトル in 広島商船」を開催します

「ビブリオバトル」は発表者（パトラー）がおすすめの本を5分で紹介し、参加者が「どの本を一番読みたくなったか？」を基準に投票し、チャンプ本を決める知的書評ゲームです。

図書館では10月7日（月）に開催するビブリオバトルの発表者（4年生以上）、当日の運営に協力いただける方を募集しています。チャンプ本に選ばれた方は広島県立図書館で開催される全国大学ビブリオバトル2019地区決選に出場できますので（交通費支給あり）、ふるってご参加ください!!聴衆としての参加も大歓迎ですので、当日お気軽に会場にお越しください。

参加申込み・問合せ先

E-mail: tosho-k@hiroshima-cmt.ac.jp Tel: 0846-67-3007

広島商船高専図書館 津村

◆◆◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆◆

令和最初の図書館だよりの今号には、流通情報工学科長の田上先生と新任の先生方からご寄稿いただきました。お忙しいなか記事をお寄せいただき、どうもありがとうございました。また、表紙および2ページの写真は、三江線廃線跡活用に取り組んでおられる風呂本図書館長から提供いただきました。

私は今年の春から商船の図書館にやってきましたが、最初は閲覧室から見える美しい海の景色に感動しました。上級生の方はもう見飽きた景色かも？ですが、この恵まれた環境で、ぜひ勉強や読書に励んでください。

◇編集発行：図書館運営委員会（令和元年度）：風呂本武典（図書館長・流通情報工学科）・山下航正（一般教科）・清田耕司（商船学科）・田上敦士（流通情報工学科）・峠 正範（電子制御工学科）

◇〒725-0231 広島県豊田郡大崎上島町東野4272-1 / TEL：0846-67-3007

◇ホームページ：http://www.hiroshima-cmt.ac.jp/facility/lib.html